

2011年6月27日（月）

マレビト・スタディーズ vol.1

何故、「女優論」なのか

なぜなのでしょう、私は女優というものが好きになれませんでした。苦手というか。わたしを見てっ、という自意識がどの女優さんにも感じられて、できることなら距離を置きたいと思ってしまう。しかし、わたしを見てっ、というのはなにも女優に限ったことではなくて、そのような自意識は男性の俳優にもあることのようにも思えます。とくに、ナルシズムは俳優のほうに多くある傾向なのかもしれません。

だから、俳優の自意識が理由になる、というのではちょっとおかしいのかもしれない。

理由もなく、女優が苦手というのは、私に女優というより女性に対する、抵抗感のようなものがもともとあってそうなっているのではないか、などとも思ってしまう。いわゆる、ミソジニーですね。女ぎらいが女優ぎらいの原因というのも、なんとも、単純すぎますが、それだけに、このことは根深い問題に思えるし、この国の男のあつまりにあるような、そして会社や劇団のようなホモソーシャルな集団の一員としての自覚から、「女ぎらい」＝「女優ぎらい」を考え始めてもいいのではないかと思ったのです。

男とか女とかちっとも私は頓着しないとか、男と女は違うに決まっているから仕方がないと性急に割り切るよりも、いつの間にか身体に刻み込まれている「性差」や男女間の支配／被支配の「まなざし」のことをじっくり考察してみるのは、演劇活動をおこなううえでとても重要なことに思えました。

そもそも、「女優」とはなんなのでしょう。

池内靖子さんの近著『女優の誕生と終焉』を読んで感じたのは、女が女優になり「女」を演じることは、男が俳優になり「男」を演じることとは大きく違うのではないか、この非対称性への池内さんの違和感でした。そのいきさつとしては、日本の近代が産出した、帝国の（あるいは演出家の）支配に都合の良い利用のされかたで、女は女優となり、男の側からの、そしてなによりも西洋からのまなざしを受け止めるべく理想的な（幻想的な）「女」を演じさせられているのではないか、ということです。さらに、それは同時に、日本の近代がつくった「女優」がその植民地の模範的な女性像をも演じることになる、ということでもありました。

しかし、この著作で池内さんは女優の来歴を述べるにとどまりません。冒頭で示されたのは女優第一号の松井須磨子の「三態」という彼女自身が扮する三人の女性の姿を写した写真のことで、それは、彼女が二人の西洋の女性を演じているなかで、真ん中で、一人の朝鮮人女性を演じて、堂々と立っているというものでした。池内さんは、次のように述べています。

「これを、帝国の女による植民地の女の領有的な表象と評することも可能であるが、二十世紀初頭の日本帝国における「新しい女」でもあった須磨子の、臆することのない立ち姿は、伝統的な衣服を身に纏った植民地の女と帝国の女双方の内面を貫く近代的個我の意思を鮮明に表出しているように思われる」

植民地の女と帝国の女の内面。その二つを貫く近代的個我の意思という言葉に、「女」という一つのジェンダーにおさまりのつかない、なにかを感じました。私は、女優が「女」を演じるのではなく、植民地と帝国の二つに引き裂かれたがゆえに生まれた「意思」を演じている、という池内さんの発見に驚いたのです。「演じる」という不思議は、そこにあります。須磨子が、西洋人女性を演じたときの違和感のほうがよっぽど女優らしく思え（つまり、定着している感じがする）、朝鮮人女性を演じたときは、もはや女優には思えないほど違和感がないのです。そのとき、堂々としているのにハラハラするような「おさまりのつかなさ」を感じる、というのはなぜなのでしょう。

このことは、この著作、第三部のポストアングラの表現者たちのジェンダーを攪乱するような演技行為にもつながっているのではないのでしょうか。それらを「女優の演技」と呼ぶには、あまりにも痛々し過ぎました。

永井愛さんの新作「シングルマザーズ」を観て、暗澹たる気持ちになったのは、私たちの社会が女性を排除しながらも巧妙に支配する構造であり、子供を産ませながら、真綿で首を絞めるように搾取する悲惨な現状でした。そしてなにより、それを可視化することに成功しえた希有な舞台でした。

また、ある意味、その現実へ向き合わねばならない彼女たちのありさまは滑稽であり、ジェンダーの境界面（DVの加害／被害をめぐるやり取りから出現していたように思います）をあらわにせざるをえない振る舞いようは、新たな連帯の到来を告げていたのではないのでしょうか。そして、その境界面は、この社会の現実においては、男だとか女だとか言ってられないほどに働かねばならないというときにこそ、女は「男ではない」ということが彼女たちシングルマザーズに立ちほだかるという絶望的な性差のことでもありました。

そういうわけで、私は、お二人に、「女優」と女優の演じる「女」のことについて意見を聞きたいと思ったのです。

マレビトの会
松田正隆